

冷酷無慈悲なドS騎士の狂愛から逃れられません

目次

冷酷無慈悲なドS騎士の狂愛から逃れられません

5

番外編 死神に出来る、たった一つの愛し方

269

冷酷無慈悲なドS騎士の狂愛から逃れられません

プロローグ

「え？ 淫紋？」

それは美桜にとつて、降って湧いたような話だった。

色とりどりの花卉が浮かぶ豪華な浴槽で、愛する人と二人きり。不意にそう告げられて、美桜は思わず耳を疑った。

「淫紋って、あの淫紋？ ちょっと待ってよ、何でわざわざそんなもの……」

美桜は振り返るように身体を振り、自分を抱き抱える姿勢で湯に浸かる男——デュオンの顔を覗き込んだ。熱を孕んだ、淡いブルーの瞳と視線が絡む。

「特別な淫紋を施すことで、互いに身体を治療し合えるようになるらしい」

「それって、例えばデュオンが怪我をしたら私が治してあげられるってこと？」

「ああ、そうだ。お前が怪我をしたり病気になるったりしても、俺が触れるだけで治してやれるようになる」

そうだとしたら物凄く便利な代物だ。

騎士であるデュオンはしゅちゅう血みどろで屋敷に帰って来る。大概は返り血だが、ごくたまに大怪我を負っていることもあり、肝が冷える。

美桜に早く会いたくて戦場で無理をするのだと、デュオンの上官が呆れながらも教えてくれた。

「でも、淫紋なんてどうやって……」

「魔法使いにやらせる。アイツはああ見えて優秀だ。お前も知つての通り、すでに実績もある」

「……まあ、それはそうだけど。でも、うーん……」

件の魔法使いは恋人に、自分と対になる強力な淫紋を施している。下心を持つて二人に近付けば、男も女も不能になるらしい。加えて、彼ら自身も互い以外の異性に下心を持った瞬間、大怪我を負うとか負わないとか……

「別にお前に不都合はないだろう。俺以外に目を向けさえしなければ害はない」

「いや、そういう問題じゃなくて……淫紋って、多分下腹部に入れるんだよね？ そんなところ人に見せるの恥ずかしいんだけど。それに、デュオンはいいの？ 私が他の男の人に身体を見せるの」

「問題ない。服の上から施せると確認済みだ。お前と魔法使いを二人きりにするのは癪だが、ほんの数回だけだ。淫紋さえ施せば、か弱いお前の身体を俺が治療してやれるようになる」

淡々とした口調だが、紡がれる言葉は驚くほど甘い。身体の作りが違い、すぐに体力を失う美桜のことをデュオンなりに心配しているらしい。

「……分かった。でも、良いことばかりじゃないんでしょ？ デメリットもあるんじゃないの？」
怪訝な表情の美桜に、デュオンはよくぞ聞いてくれたとばかりにニヤリと笑う。

(つ、……急にそういう表情するの、ほんとズルい)

出会ってからそれなりに時間が経ったというのに、未だに些細な表情の変化にも見惚れてしまう。
デュオンは超がつくほどの美形だ。溺愛系の創作物や乙女ゲームで目の肥えた美桜が一目惚れしたくらいに。

「デメリットなどない。敢えて言うなら、感度が上がって、ますます乱れるようになることぐらいか」

そう言い終えると、デュオンは片手で金の髪を掻き上げた。水に濡れた逞しい腕や手の甲の筋がどれほど魅力的か、自覚しているのだとしたらデュオンは相当な策士だ。本当に、どれだけ美桜の気持ちを揺さぶれば気が済むのだろうか。

「こそも、触れるだけで下から溢れるようになるだろうな？」

不意に美桜の胸の先を飾る桃色の突起を摘んだ。急な刺激に、油断していた美桜の唇から甘い吐息が漏れる。

「あ……んっ、デュオンったら……何言って……」

腕の中に閉じ込めるような体勢で、デュオンは美桜の首筋へ口付けを落とした。

しつとりと濡れた首筋には、すでにいくつもの赤い痕が散らばっているというのに、デュオンは

さらに新たな痕を重ねていく。

「お前がもつと乱れて、ぐずぐずでどうしようもなくなったら、一体どうなるのか見ものだな」

デュオンの手はゆつくりと真つ白な乳房を揉み上げ、もう片方の手はすると下腹部の方へ伸びていく。薄い腹をそつと撫でてから、下生えの奥に隠された柔らかな割れ目に指先を這わせた。

「ふ……うん……はあ……さっき……したばっか……」

甘い吐息を漏らしながらも抗議する美桜に唇を寄せ、デュオンは耳元で囁く。

美桜が大好きな、低くて蕩けるような声だった。

「何度しても足りない。俺を癒せるのはお前だけだ。渴ききった喉を潤すには、たった一杯の水だけでは足りないだろう？ そういう時には何杯口にしてもキリがない。満足するまで飲み干すしかないんだ」

湯船の中でデュオンは美桜を抱いたまま、弱いところを執拗に刺激する。我慢しようにも堪えられず嬌声を上げると、満足げに耳たぶを噛んできた。

「や……っつ、ああ……ん、はあ……はあ……そこ、好きな……分かってるくせに……」

指先が下生えの中で柔らかな突起を見つけて擦り上げる。同時にゆつくりと美桜の内側に指が入って来た。つぷり、つぷりと数を増やされると、先程まで寝台でデュオンを受け入れていたそこは、待ち侘びていたかのようにひくついてしまう。

「当然だ。お前の身体で知らないところはない。どうした？ 腰が揺れているぞ」

「だって……え、気持ちいい……んだもん……っ」

背中に感じる熱くて硬いものをまた挿れて欲しい。そんな欲求がどんどん高まって、いつの間にか自分からそれに手を這わせていた。

「はしたない奴だ。我慢できずに自ら挿れようとするなんてな」

「……ッ、ハア……ハア……別に……っ、いいじゃない。欲しいんだもん。ふ……う、ああ……っ！」

慎重に腰を持ち上げ、いきり立った楔をひと息に内側に収める。その瞬間歓喜で全身が震え、それだけで達しそうになった。

「ああん……ッ！ デュオン……っ！」

快感に酔いしれ、なかなか動けない美桜の身体をデュオンは軽々抱き上げると、浴槽の縁に手をかけさせた。

自分の方に腰を突き出させてするのは、デュオンが一番好む体位だ。

「やつ……！ ああんっ！ アッ！ んう……っ！」

「お前もこの姿勢が好きなんだろう？ 喜んで俺を離そうとしないのが答えだ」

「やだ……そんな……っ、あああ……っ！」

濡れた肌がぶつかり合う音が広い浴室に響き渡る。それがまた卑猥で、大きな快感に嬌声を上げる美桜の耳を犯した。

細い腰を両手で支えながら、激しい抽送は幾度も幾度も繰り返される。美桜は奥の方を刺激されるのが一番弱いのだとデュオンはよく知っていた。だから、容赦がない。

「も……ダメ……っ、イッちゃう……う！ ああ……っ！」

悲鳴のような声を上げ、ビクビクと弓形に反らした美桜の身体を、デュオンは背後から抱きすくめるようにして突き上げる。

「……ッ」

「淫紋を施したら、身体を癒しながら際限なく抱くことが出来るな」

そんな悪魔のような囁きを耳にしながら、強過ぎた快感と長湯でのぼせてしまった美桜は、くつたりと浴槽の縁に倒れ込んだ。

「それ、死んじゃう……」

ドクドクとしたデュオンの脈動を身体の奥で感じつつも、美桜はそう言って意識を手放したのだ。

「そう簡単に死なれては困る」

デュオンにとって美桜は唯一であり、絶対的な存在。

百年以上も捜し続けた番には、まだまだ元気でいてもらわねばならない。

やっと手に入れた幸福の日々は、始まったばかりなのだから。

第一章 不憫過ぎるヒロイン、怪しい話に乗っかる

「何で私がこんな目に……」

ベッドのヘッドボードにぶら下げられた、進藤美桜という名前と主治医の名前、腫瘍内科という診療科名が涙で滲んで見える。

成人と同時に両親を亡くし、一人っ子だった美桜は仕事に打ち込むことで寂しさを紛らわせた。恋愛なんかそっちのけで仕事に打ち込み、おかげで順調に出世し、やりがいを感じる日々。同級生や同僚が次々と既婚者になっていく中、いつの間にか三十七歳で独身。意地で独身を貫いていた訳ではなかったが、もう長いこと恋人はいない。

「これからもずっと、私は仕事に生きていくんだと思ってた。定年になったら貯めたお金で施設に入って、悠々自適な人生が待ってるんだって……」

もはや趣味にさえなっていた貯金は、今年に入って一千万を超えた。

人生これからまだまだ長いと少しも疑うことなんかなかったし、まさかこんなことになるとは思ってもしなかった。

「……死にたくない」

半年前、初めて受けた人間ドック。そこで子宮がんが発覚した、それも末期の。肺やリンパ節にも転移していることが分かった。

まさか自分が……と何度も口にした。一般的な健診は会社でちゃんと定期的に受けていたのに、と何度嘆いたか分からない。

抗がん剤治療は辛すぎる。枯れ枝みたいにやせ細った腕に、薄くなったボサボサの髪。

見舞いは全て断っていた。それでも周囲からは『デキる女』だと思われていた。そう見られるよう、身だしなみや立ち居振る舞いにずっと気を付けて来たのだから。

ただ仕事が出来ただけじゃ認められない。会社という集団の中では、外見や性格も大事だ。そう理解してからは、適度に自分にお金をかけて『いい女』を目指すようになった。おかげで男女問わず同僚から頼りにされ、部下からは尊敬の眼差しを向けられていた。

どうすれば周囲が認めてくれるかを一番に考えて行動してきた。全ては自分の努力の賜物だという自信があった。

だからこそ弱り切ったこんな姿、誰にも見られたくない。

「お金があったって、私にはもう好きに使う時間がないんだ……」

余命宣告からひと月が経ち、残りの人生は良くて数ヶ月。

いくら納得いかなくても、これが現実なのだから認めるしかない。たとえ望んでいなくとも、死という現実に向かってひとりでは足は進み、ぽつかりと空いた真つ暗闇に今にも飛び込もうとして

いた。

「う……っ、うう……ッ」

無機質な印象の個室に美桜の鳴咽^{おえう}が響く。ベッドの上で、折り曲げた硬い膝に顔を埋める。涙でパジャマがどんどん濡れていくのを肌で感じた。

そんな時、頬に当たる空気が揺れたような気がした。目を開けると、いつの間にか目の前に人が立っていた。

黒いスーツに赤い瞳、ちらりと口元に見える八重歯の白がいやに目立つ男が、大きな鎌を持ち美桜を見下ろしている。

「だ、誰……っ!？」

慌ててナースコールを探す美桜の右手を、男がグッと強く握って制した。

自分以外の全てを馬鹿にしているような、どうにも真意の読めない顔を向けられてゾッとする。

「おめでとうございます、進藤美桜さん！ あなたは私達の新企画、『お金と引き換えに第二の人生を歩む権利』を得たのです！」

やけに演技めいた言い方でそう告げた男は、指でパチンといい音を鳴らした。

すると見慣れた病室が一変し、辺りは真つ白な空間へ変化した。上も下も分からない、どこまでも白い空間だ。

「どうということ？ あなたは誰？」

「ああ、驚くのも無理はありません。皆さんはじめはそうですから。私の名前はテトラ。死神です。冥府の番人である冥王の手となり足となり、人間の魂^{たましい}を集めるのが仕事です」

「しにがみ？」

宣告された余命まではまだあるはず。死ぬのはもう少し先だと思っていたけど、何らかの事情で早まってしまったのだろうか。

まだ死を受け入れられるような心境ではない美桜は納得がいかず、相手が死神だろうが構わないと盛大に囁みついた。

「まだ私が死ぬには早いでしょ！ 企画だの第二の人生だの、訳の分からないことを言って……悪い夢ならさっさと消えなさいよ！」

「おやおや、死の気配がこんなに近付いているというのに、なかなか気丈な方ですね。次の人生では実に長生きしそうだ」

テトラと名乗った死神は何がそんなに可笑^{おか}しいのか、口元^{くちぶち}に拳^{こぶし}を当てて、クッククックと喉を鳴らすようにして笑う。

死の気配が近付いている……そう言われてカッと頭に血が上り、その場で地団駄^{じだんだ}を踏みながら声を張り上げた。

いつもならこんなヒステリックなことはいらない。でも、今は死への恐怖と悔しさに身体中を支配され、どうしても自制できなかった。

「次の人生って何!? あと少しで死ぬからって、次の人生がもう決まってるんでも言うの!」

「ええ、そうです。それはまあ、お金次第ですけど。一千万円と引き換えに、あなたには素晴らしい第二の人生を与えて差し上げましょう」

大袈裟な身振り手振りで芝居がかった言葉を吐くテトラを、美桜は思いつきり睨みつける。

(コイツ……死神の癖に、一千万円なんて大金をどうするつもりよ。しかもちようど私の貯金が一千万くらい。そんな偶然である? 怪しい……怪し過ぎるわ)

死者の魂を奪うために死神が現れるのは理解できる。だけど、大金と引き換えに第二の人生を与える死神なんて、フィクションの世界ですら聞いたことがない。

「あ、今私のことを怪しいと思いましたね? 死神の癖に、一千万円なんてどうするつもりだってそれに、第二の人生を与えるだなんておかしいって」

わざとらしく眉を下げ、いかにも悲しそうな表情を作るテトラに、美桜はこれでもかというくらい冷ややかな視線を向ける。テトラは美桜のそんな態度すら楽しんでるようだ。

「そこまで分かてるなら説明しなさいよ」

「本物の死神相手に、ここまで強気な人間は久しぶりですよ。しかしそこまでおっしゃるのならこのテトラがきちんと説明しましょう」

「いいから、早くしなさい」

どこか楽しいテトラは、重そうな大鎌を軽々と肩に乗せ、人差し指を立てて説明を始めた。

「まずあなたには私と契約を結んでいただきます。今生では魂を奪わない。代わりに対価として一千万円を支払い、次の人生の終わりにはこの私、テトラに魂を下さるとお約束ください。そうすればあなたには、理想的な第二の人生が約束されます」

これはもしかすると病のせい、あるいは薬の副作用によって見ている悪夢なのかも知れない。

(でも万が一、この死神の提案が本当だとしたら……大きな後悔で幕を閉じようとしているこの人生の先に、第二の人生があるというのなら……見てみたい)

本当はもつともつとしたいことがたくさんあった。あの時ああすれば良かったと、やり直したいと悔いていることもある。

次の人生でそれが叶うのなら、どうせこれから使い道のない一千万円なんて、この際渡ししまつてもいいかも知れない。そんな考えが美桜の頭をよぎった。

しかし、たとえどんなに魅力的な提案であっても、美桜はすぐにイエスとは言わない。

なんてつたって相手は死神だ。答えは慎重に決めなければならないだろう。

「確かに魅力的な提案だけど、それってあなたにはどんなメリットがあるの?」

「と、言いますと?」

「今の私にとって一千万円はほぼ無価値なものだし、別になくなっても惜しくないけど、死神にお金なんて必要ないんじゃないの? それに、わざわざ第二の人生を歩ませた後に私の魂を奪うつても、はつきり言って意味不明」

芝居がかった言動が鼻につくものの、このテトラという死神の持っている大きな鎌はおそらく本物。一振りされればあつという間に美桜は命を失うだろう。なら、契約など結ばず、今すぐ美桜の魂を奪ってしまえばいいはずだ。

美桜の胡乱な眼差しに対し、「待っていました！」と言わんばかりの嬉しそうな顔をしたテトラは、鋭い八重歯を見せながら笑う。

この死神、顔立ちは整っているが如何せん胡散臭い。

「それが、メリット大アリなんですよ！ 私達死神は普段人間としてこの世界に紛れていますから、お金はいくらあっても困りません」

テトラは親指と人差し指で丸を作り、フリフリと揺らして見せる。死神の癖に妙に俗っぽいところが、さらに胡散臭い。

「そ、そうなの。それは知らなかったわ」

「そうでしょうとも。加えて、今は世の中が不安定ですからね。死人が極めて多いんです。おかげで簡単にノルマを達成できてありがたいのですが、今魂を取り過ぎると、今後死人が少なくなつた時に困るでしょう？ だからストックしておくんです。時間差で魂を奪えるようにね」

「ストック……」

「はい。ストックです。死人の数には大きな波がありますので、ノルマ達成が難しい時に備えてストックしておくと重宝するんです。今死にそんな人間に第二の人生を与えれば、実際に死ぬタイミ

ングまで時間差が生じますから」

人の命をまるで野菜か果実かのように、調整して上手く収穫時期をずらすのだと軽い口調で語るテトラに、ほんの少しだけ期待で浮ついていた美桜の心がスツと冷めた気がした。

人間のことわりとは全く違う考え方で生きる相手と対話していることを強く実感した。

「さあ、これで分かってもええましたか？ 死神の私にとって、あなたのような人に第二の人生を与えることなど容易いのです。馴染みの輪廻転生を司る神に、少しばかり袖の下を渡すだけです。それだけで大金と魂のストックが手に入るなんて、私にはメリットしかありません。あなただって、もう一度人生をやり直せるのですよ！」

輪廻転生の神が死神に買収されるとは、なんとも頭の痛い話だ。美桜達にとつての常識やモラルなんて、彼らからすると逆に非常識なのかも知れない。

「……人生をやり直すって、具体的にどんな風に？」

「おっ！ 乗り気になりましたね？ もちろんそうでしょうとも。あなたの魂も記憶もそのままに、第二の人生を歩むチャンスを目の前にぶら下げられているんですから」

このテトラという死神はいちいち話が長く、何というか……大袈裟なほど声を張り上げてくる。常日頃、静かな病室でたった一人で過ごしている美桜の耳は、ジンジンと痛いほどだ。

「それって、普通は一度死ねば魂や記憶は変わってしまうということ？」

「はい。人生の記憶とともに魂はリセットされ、輪廻転生の流れに乗って生まれ変わるのを待つ

のです。ですから通常は同じ魂で二度目の人生を歩むことは出来ません。しかしながら私と契約を結んでくだされば、進藤美桜さんの魂のまま、新しい人生を歩むことが出来るのです！」

（私が私のまま、やり直せる……）

美桜の心が再び揺さぶられたその時、テトラはとっておきの手札を披露するかのような仕草をしながら、さらに言葉を重ねた。

「進藤美桜さん、あなた乙女ゲームが好きでしたよね？ 次の人生は、乙女ゲームのヒロインのような人生はいかがでしょう？」

「な……っ！ なんでそれを！」

実は、美桜は二十代の頃から乙女ゲームにハマっている。

これまで仕事を優先する人生を歩んできたせいも、まともに異性との恋愛が続いたことがなかった。というか、どうしても相手に夢中になり切れず、はつきりと成果の出る仕事の方が美桜の心を満たしてくれた。

でも本当は、友人達のように思いつきり愛し愛されてみたい。そんな密かな願望を美桜はずっと抱いていた。

だからなのか、恋愛のときめきのようなものを求めて三十七歳の現在も乙女ゲームのヒーロー達に癒されている。そして、それは『いい女』を目指して頑張ってきた美桜としては絶対に周囲にバレたくない、秘密の趣味だった。

「私は死神ですから。狙った獲物の情報を集めるのは簡単なことです。どうしますか？ このまま死んだって死にきれないでしょう？ 第二の人生を乙女ゲームのヒロインのように、情熱的な恋愛で彩ってみてはどうです？ 刺激的な毎日はずっとあなたを満足させてくれるはずですよ！」

ほどなくして美桜は今生を終えた。口座にあつたはずの一千万円は、どのような手を使ったのか無事テトラに渡ったらしい。

現実世界も乙女ゲーム並みに何でもアリなんだな、と一介の人間である美桜はしみじみと思い知らされた。

そして美桜は、白ずくめの格好に、長い白髪という新興宗教の教祖のような輪廻転生の神によって、第二の人生を得たのだった。

「嘘でしょ……」

美桜の口から思わず漏れたその呟きは、この場所に来てもう何度目だろうか。

鼻をくすぐるのは、最近ではなかなか嗅ぐこともなくなった森林の香り。土や植物が醸し出す、あのなんとも言えないスツとした香りで美桜は目を覚ましたのだった。

ザワザワと葉っぱが擦れる音や遠くに聞こえる鳥の囀り、そして吸い込まれるような青い空は、豊かな自然そのもの。都会で暮らす日々の中では触れ合う機会がなかったものばかりだ。

森の木々がそこだけぽっかりと切り開かれたかのような空間に、雄大な美しい湖があった。岸からほんの少し身を乗り出せば、すぐ湖面に手が届く。

手のひらで湖面を撫で、そこに映る自分の顔を波紋でザラリと掻き消す。静かになった水面に映る顔は、やはり見慣れた自分のものではない。

伸ばしっぱなしの乱れた黒髪と貧相な頬、痩せぎすの上半身は病院にいた頃とさほど変わっていない。だけど、その顔は享年である三十七歳より明らかに若い。

(シミも皺も……ない。痩せてはいるけど、肌がすっごく綺麗に見える)

アラフォーになってすぐ手の甲にポツポツと現れた忌々しいシミが今はない。

いつの間にか年齢をひしひしと感じさせるようになった肌も、まるで十代の頃に戻ったかのように瑞々しい。

顔つきも、以前よりはっきりしているような……外見そのものが全体的に美化されたかのような印象だ。

(それに……息苦しくないし、咳も出ない……)

肺転移のせいで毎日続いて苦しくて堪らなかった咳が嘘のように治まっている。

「それにしても、第二の人生って……赤ちゃんからやり直す訳じゃないのね……」

屋外の、しかも森の真ん中で自分が身に纏っている衣服は、薄い布で出来たワンピース一枚だけ。扇情的なネグリジェのような華奢さで、非常に心許ない。

かろうじてショーツは身に着けているようだけど、ブラジャーはない。こんなに無防備な格好で屋外に出るのはもちろん初めてで、やけにスースーして落ち着かない気分だった。

「結局、テトラから詳しいことは何にも聞いてないんだけど」

そう言いつつ辺りを見渡してみる。目が痛いくらい明るい青空の下で、同じような木々が見渡す限り続いていた。

てっきり赤ん坊から人生をやり直せるものだと思っていた美桜は少々がっかりしていた。

魂も記憶もそのままなら、いっそ天才赤ちゃんになって、新しい両親や世間を驚かせてやりた

いと密かに企んでいたのだがアテが外れてしまった。

「テトラ！ どこかで見てるの？」

『お目覚めですか。生まれ変わり、おめでとうございます』

と、突然どこからか声がした。テトラだ。

姿形はどこにも見えないが、すました声が美桜の周囲にパッと降り注ぐかのように響く。『進藤美桜さん、あなたはこのラナトゥル王国で第二の人生を楽しんでください。ここはいわゆる異世界です。それと、こちらの都合で申し訳ありませんが、あなたの今の年齢は十九歳です。名前は……適当に決めてくれればいいですよ』

「十九歳!? もう二十年近く人生を終えちゃってるじゃない!」

『あくまで取れる魂たましいの数を調整する為の企画ですので、新たな人生の始まりの年齢はこちらで調整させていただきますね』

「ちよつと! まるで詐欺さぎじゃない。一千万円も取っておいて!」

『まあまあそうおっしゃらずに。せっかくの第二の人生ですから、どうぞ楽しんでください! あ、もし納得いかないようでしたら、また一千万円貯めて再契約してくださいませんよ』

(コイツ……勝手なことを! 一千万円貯められたのは日本で、身を削る思いで仕事を頑張ったからなのに!)

使われている通貨も、貨幣価値もよく分からない国でそう簡単に稼げる訳がない。

そもそも異世界だということの国のことを美桜は全く知らないのだ。

『ちなみに、日本円の一千万円はラナトゥル王国で言えば一千万フェルンですね。分かりやすいでしょう? それと、これはささやかなプレゼントですが、この国の言語を自動的に使えるようにしてあります』

「あら、一千万円の価値に見合うチートな能力をどうもありがとうございます!」

うっかり意地悪なお局のような口調になってしまった。あからさまに皮肉を込めたこんな言い回しは、日本にいた頃は絶対にしなかった。感じの悪い言葉を吐き捨てた自分に驚きつつも、やがてフツと苦笑くせういが込み上げてきた。

(この世界には、過去の私を知っている人はいないのよね。もう『いい女』でいる必要はない) テトラは美桜の言葉に気分を害した様子もなく、「そうそう、それとですね……」と楽しそうに話を続けた。

『乙女ゲームばかりで現実の恋愛はからつきし縁のない、超が付くほど耳年増みみどしまな進藤美桜さんに、私からプレゼントがあります』

「耳年増みみどしまって……! 失礼ね! 私は理想が高いから、なかなか素敵な相手が見つからなかっただけよ! 乙女ゲームのキャラ並みに理想的な相手なんて、そうそう見つかる訳ないじゃない」

美桜は子どもの頃に憧れていた、絵本に出てくる王子様のような風貌の男性に惹かれる傾向がある。乙女ゲームでも、金髪で青い瞳のいかにも王子様といったキラキラしたキャラばかりプレイしていたほどだ。

ヒロインをとにかく溺愛でんあいするキャラだとなお良く、愛が深い故の束縛や嫉妬はありがたい副産物くらいに思っている。

しかし現実はそのような異性が身近に存在する訳もなく、乙女ゲームの世界でばかり恋をしては満足する日々だったのだが。

「……それで? プレゼントって、何?」

姿は見えないが、テトラが美桜の様子に笑いを堪こらえるようにして肩を震わせているイメージが頭に思い浮かんだ。

『ふふふ……進藤美桜さんへのプレゼントは、理想の攻略対象です。第二の人生は、乙女ゲームのような人生だと言ったじゃないませんか。お相手は金髪で、青い瞳の美男。外見は完全無欠の王子様と言っても過言ではありません。ほら、その方の外見イメージが今頭に流れ込んできたでしょう？』

テトラの言葉とともに美桜の頭に流れ込んできたのは、輝く長い金髪に切れ長の淡い青の瞳、シュツとした鼻筋に形の良い唇を持つ男性。筋肉が程良く付いた首筋は色気があり、すっきりとした顔の輪郭は美桜の理想そのものだった。

漫画やアニメの世界からそのまま飛び出してきたかのような顔立ちに、美桜は一瞬呼吸が止まった。

「……うそ……」

これまでプレイしてきたどの乙女ゲームのキャラよりもドンピシャに好きな外見をした彼に、美桜はポカンと口を開けたまま固まってしまふ。

こんな素敵な男性が本当に実在しているのなら、一目見られるだけでも幸せだ。

テトラによって美桜にあてがわれた攻略対象なのだと言われても、にわかには信じ難い。

『プレゼント、気に入っていただけたようで嬉しいです。ちなみに、この攻略対象の男性にとつての理想の相手は……なんと進藤美桜さんなんです！ このチート、一千万円払った価値があったでしょう？ せっかくの二度目の人生ですから、素敵な恋愛が出来るよう、せいぜい頑張ってください』

いね！』

「確かに、これはチート過ぎるわ……」

未だぼううつとした頭でそう呟くと、テトラはやけに嬉しそうに言った。

『では、また近々様子を見に来ますね。お相手とはちゃんと出会えますから！ それでは！』

頭の中に直接響くかのように聞こえていたテトラの声がびたりとやんで、代わりに鳥の囁きや水のせせらぎの音が一気に大きくなった。

「……さっきの、夢じゃない……よね？」

テトラがどんな手を使ったのかは分からないが、頭の中に流れ込んで来た男性のイメージは、まさに美桜の理想そのものだった。

凛々しい眉と切れ長の瞳の距離が短めなもの、顎のラインが直線的でシュツとしているのも、惚れ惚れするほど美しい角度の鼻も。上半身だけの姿だったため全体の身体つきは分からないが、引き締まった逞しい筋肉が服の下に隠されているに違いない。

「どうしよう……本当に、あの人が私の恋人に……？」

年甲斐もなく——と言っても今は十九歳の肉体なのだが、美桜は顔を両手で覆い、耳まで赤く染めて「キヤーツ」と何度か叫んでしまった。

ひとしきり興奮した後、ふと冷静になる。

(でも、そんな上手い話ある？ 何だかあの死神の手のひらの上で転がされているような……)

でも、せっかく第二の人生を得たのだから、一人の女性として幸せになりたい。愛し愛されたいと思うのは当然の欲求だろう。

以前はとにかく『いい女』である自分を作り上げ、仕事に生きた人生だった。唯一の癒しである乙女ゲームから補給していたドキドキやときめきを、実際の恋愛で得られたらどんなに幸せだろうかと思像する。

「あの死神が何を考えてるのか分かんないけど、どうせ一回死んだ身なんだし、ダメ元で頑張つてやろうじゃない」

（何もせずに後悔するのはもう嫌。次は自分の思うまま素直に生きてやる。もう誰も前の私を知っている人はいないんだから）

そう決意したものの、何から始めればいいのか、どこへ行けばいいのかさっぱり分らない。

目の前に静かに広がる湖はまるでひょうたんのような形をしている。全周一キロくらいだろうか。水深は分らないが、岸から少し離れたらおそろく美桜が立つことは出来ないくらいには深いだろう。キラキラと光る小魚が群れになって泳ぐ姿も見えた。

「魂はそのままだに……別人に生まれ変わる……か。見た目は確かに綺麗になつてるし、若返ったのも嬉しいけど、どうせなら私も金髪とか、青い目にして欲しかったなあ」

あんな華やかな西洋風イケメンの相手にしては、日本人らしい顔立ちの自分が物足りなく思える。「ま、こうして健康に生きているだけでも幸せなことなのね。病気の時は健康な身体が喉から手

が出るほど欲しかったんだから」

少し動けば息切れして何度も咳き込んでいたことが嘘のように、足取り軽く動ける。そんなことに改めて感動した。

岸に沿って五百メートルほど歩いただろうか。遠くから微かにドドドという地鳴りのような音が近付いてくるのに気付き、足を止める。

森の中を大きな猪が駆け抜けていくイメージが頭をよぎり、美桜はブルリと身体を震わせた。

「おい！ 見ろよ！ 女だ！」

がなり声とともに木々の間から現れたのは、大きな馬に乗った男達。どう見ても悪党としか思えない面構えで、いち、に、さん、し、ご、六人もいる。これは猪よりもタチが悪そうだ。

「こりゃあシカやウサギよりよっぽど嬉しいね！ ちよつと痩せ過ぎだが、黒い髪とは珍しい。もしかしたら高く売れるかもな！」

「誰が奴隷商人のところへ連れて行くかは早い者勝ちだ。文句なしだぞ！」

屈強な男達が雄叫びを上げながら馬を操り、どんどん距離を詰めてくる。

「奴隷って何よ！ こういうのって、漫画や小説ではあるんだけど、病み上がりの私にダッシュはキツすぎるわ！」

今はまだ百メートル以上離れているが、馬と人間の足ではとても相手にならない。ただただ木々

しか目につかないこの森で、走りながらどこに逃げたらいいか思案しているうちに、美桜はあっけなく捕まってしまった。

「ぐふふ……お前、異国人か？ たった一人、こんな森の奥で何してたんだ？」

逃げる術のない美桜はいとも容易く男に縄で縛り上げられ、荷物のように馬に乘せられた。

男の不潔な外見と体臭に思わず顔を背けると、嬉々として囃し立てられる。

「ははは！ 残念だったな！ お前とは話さねえってよ！」

「お嬢ちゃん、今からでもこっちの馬に乗り換えるか？」

男達はどう見たって日本人ではない。どちらかと言えばヨーロッパ系の特徴を持った外見をしている。

服装も……何というか、質素で古めかしい。それにどの男もシャツにズボン、ブーツ。そして、弓矢を身に着けているのだ。

そう、まるでまさに美桜が生前大好きだった異世界ファンタジーを舞台とした乙女ゲームや、流行りの漫画に出てくる悪役のモブキャラのようだった。

「お前らうるせえぞ！ コイツは俺が捕まえたんだ！ 手柄を取られて悔しいからって、口が過ぎるぞ！」

すぐ近くで男が怒鳴ったせいで、ビリビリとお腹の皮が震えるような振動が伝わってきた。

「ほんつと、うるさ……」

うつ伏せで頭を下げられた状態で馬に乘せられている美桜の顔は火照り、少しずつ意識が薄れてきていた。身体を締め付ける縄のせいで、呼吸も浅くなっている。

「もう……初っ端からいきなり……ハードモード過ぎ……でしょ……」

第二の人生が始まってすぐにこれでは先が思いやられる。なけなしの全財産一千万円を支払ったのに、まるで詐欺にでもあった気分だ。

先程実感した健康への喜びをすっかり忘れ、美桜はテトラを恨めしく思った。

「おい……！ おい！ 起きろ！」

遠くの方から聞こえる男の声に、美桜は沈んでいた意識を急浮上させる。

「ん……、いたた……」

いわゆる体育座りのような体勢で、壁にもたれかかったまが目が覚めた。全身の筋肉や関節が悲鳴を上げていて、思わず顔をしかめる。

何度も瞬きをしてからゆっくり辺りを見渡す。いつの間にか、質素な造りの居室に連れてこられたようだ。五歩も歩けば壁に辿り着く狭い部屋は、あまり掃除されていないようで埃っぽい。思わず二、三度咳き込んだところで怒鳴り声が聞こえた。

「いつまで寝てんだ！ 起きろ！ ったく、お前は色気もクソもない子どもみてえな女だが、黒髪は珍しいから高く売れるだろうなあ。さあ、立って早く隣の部屋へ行け！」

眼帯をつけた筋肉質な男は、苛立ちを隠すことなく未だ座り込んだままの美桜を急かした。

ぞんざいな扱いに腹が立ったが、反抗して暴力を振るわれるのは嫌だ。目覚めたばかりで状況を飲み込めずにいたが、仕方なくノロノロと立ち上がる。途中、身体が何度も軋んだ。

ハッとして衣服の乱れを確認したものの、意識を失う前と変わっていないかった。心許ないワンピースとショーツだけが、しっかりと身に着けている。幸いにも妙なことはされていないようだ。隣の部屋はやけに薄暗く、香水のような香りが充満していた。

部屋の中にはずらりと女性達が並べられている。十人はいるだろうか。眼帯の男に背中を押され、美桜も女性達の列に加えられた。

彼女達の身体は、明らかに美桜とサイズ感が違っていた。百七十センチはあろうかという高身長に、目を疑うほどに豊満な胸。

一緒に並んでいると、美桜はどうあがいても子どもにしか見えないだろう。日本で生きていた頃は、これでも成人女性としてそれなりに良い身体だったのに。

(すごく綺麗な人ばかり……これって一体何の列なの……)

しばらくして突然辺りが眩しくなった。どうやら部屋を覆っていた暗幕のようなものを取り払われたらしい。

「おお……」

立ち尽くす美桜達に、感嘆の声が降り注ぐ。

「眩しい……」

光に目が慣れたところで、美桜達を取り囲むような形で観客席が設けられていることに気が付いた。

観客席には身なりの良い男性達が座っている。年齢は幅広く、十代や二十代に見える若者からしわくちやの老人まで。ざっと見渡すだけでも、おそらく百人以上はいる。

「さあ、今宵は珍しい毛並みの女ばかりですよ！ ピンク、赤、白に黒まで！ 顔も一級品のみを選んでいます！」

クルリと渦を巻いたような、妙な形の髭を両頬に生やした男が大声を張り上げる。男はやけに気取った装いで、昔教科書で見たフランス貴族のようなジュストコールにフリルのついたシャツ、トラウザーズという出で立ちだった。

「紳士の皆様方、是非ともより価値の高い女奴隷を連れてお帰りくださいませ！」

異様な熱気が辺りを一気に包み込むのを肌で感じた。

(奴隷……確かにあの男達もそんなことを言っていたけど……)

哀れにも美桜は第二の人生の始まりで早速奴隷商人に捕まり、まさに今セリにかけられている真っ最中だった。

「早速ですが、まずはこの一番目の女！ 花びらのような桃色の髪色が珍しく、顔も身体つきも一級品！ 処女ではありませんが、本人はかなりの床上手だと申しております！ さあ、紳士の皆様

方、この女の価値はいかほどでしょうか!？」

一番前に並んでいた女性のセリがとうとう始まってしまった。紹介の文言があまりにも露骨で、気になった美桜は列から顔を出して女性の姿を確認する。

一番目の女性はまるで人気アイドルか若手女優のように整った顔立ちで、確かに大金を払ってでも傍に置きたいと望む人がいても不思議ではない。

目を凝らすと、長いまつ毛すらも綺麗なピンク色だ。唇は優しい薔薇色でふっくらとしている。まつ毛に縁取られた神秘的なエメラルドの瞳は、まさに美桜の思う乙女ゲームや漫画のヒロインそのもの。

彼女は堂々と振る舞い、ポーズをとったり身体の向きを変えたりと、その美しい外見を惜しみなく披露していた。

(何だか、買ってくださいと言わんばかりのボーjingね)

スポットライトのように眩い光が、女性の妖艶な姿をより一層引き立てていた。彼女がポーズを変える度に、どんどん値は吊り上がっていく。

「三千万フェルン」

一瞬、会場が無人になったのかと思うほどシンと静まり返った。水を打ったような静けさとは、まさにこのことだろう。

一際豪華な観客席に座る、垂れ目の男性が三千万フェルン——つまり三千万円の値を口にした

のだ。

「さ、三千万！三千万フェルンが出ました！他におられませんか!？」

髭男は声を上擦らせてそう叫んだ。クルリと巻かれた髭の下にある口角がいやらしく吊り上げられている。彼女を売ってこれから手にする儲けを想像し、嬉しくて堪らないのだろう。

(本当にお金で女性を買われちゃうんだ……)

自分の置かれた異様な状況を改めて実感し、足が震える。ここは自分の知る常識や倫理観が通用しない世界なのだと思い知る。

(何でこんなことに……あ、もしかして……!)

そういえば、と思い出す。かつて日本で目にした小説だったか漫画だったかで、異世界に飛ばされたヒロインが奴隷商人に捕まる話があった。

窮地に陥ったヒロインの前に颯爽と現われたのは、悪人を取り締まる騎士団長だったか、はたまた自ら悪を裁く王子様だったか。いずれにしろ、ヒロインはヒーローによって救い出されていた。

(もしかして、あのイケメンが私をこの場から助け出すシーンから恋が始まるのか?)

つい先程まで恐怖で足が震えていたというのに、現金にも美桜は理想のイケメンとの出会いを想像し、胸を膨らませた。

「おめでとうございます！三千万フェルンで落札です!」

結局、誰も三千万フェルン以上の値は口に出来なかったらしい。ピンク色の髪の女性は垂れ目の

男性に買われてしまった。

男性は襟元を緩め、服を着崩しているものの、仕立てそのものは上質そうで『食えない大人の男キャラ』といった雰囲気醸し出している。年齢は三十歳くらいだろうか。

(無精髭^{ひげ}だけど、よく見ると案外若くてイケメンね。女性の方も喜んでるみたいだし)

金持ちかつ魅力的な男性に買われて、ピンク色の髪の彼女はとても満足げな様子だ。上々の結果だったのだろう。三千万フェルンという大金に見合う価値が自身にあると認めて貰えたことも、彼女にとって嬉しかったのかも知れない。

「一番目の女を競り落とした奴って……第三騎士団の団長じゃないか？」

どこからかそんな声が聞こえてきた。どうやらピンク色の髪の女性を買ったのは、騎士団長の職に就いている人物らしい。

(え？ あの人が騎士団長？ ちょっと待って、そんな立場の人が奴隷を買っているの!? っていうか、セリを取り締まりに来たんじゃないかって客として買いに来たの!?)

予想外の展開に美桜は混乱する。

「いいよな、金持ってる奴は。あんない女をモノに出来るんだから」

あの騎士団長はどうやらこの国でかなりの有名人らしい。席を立つた彼が、競り落とした女性のもとへ向かう姿に会場が騒めいている。

しかし、奴隷商人が二番目の女の紹介を始めると、再び会場は熱気を取り戻した。そして二番目、

三番目の女性達が競り落とされていくのを眺めるにつれ、美桜の気持ちはどんどん下降していった。

(……お願いイケメン様、早く助けに来て)

名前も知らない攻略対象の姿を思い浮かべながら、美桜は必死に祈る。

競り落とされ、有無を言わずに連れていかれる女達。好みの女を競り落とし、下卑^{げび}た笑みを浮かべる男達。そんな光景を目の当たりにし、美桜の視線は次第に床を見つめるのみとなった。

一番目のピンク色の髪の女性と騎士団長は、どちらも例外中の例外だったということを今更ながらに噛み締める。どの男性も集められた女性達を好奇の目で見下ろす野獣のように思えてきて、美桜の背筋が凍っていく。

「さあ、最後の女は世にも珍しい黒髪！ まるで子どものような体型ですが、十九歳ということめちゃんと成人しております！ さあ、いかがでしょうか!？」

ぼうっとしているうちに美桜のセリが始まってしまった。なかなか酷い紹介だと思ったが、確かにこの世界での美桜の評価はそんなものだろう。

無情にも、攻略対象の彼は現れない。

このまま第二の人生の行く末がここで決まってしまうような気がして、恐ろしくなってきた。

美桜の歯がカチカチと鳴り始める。両肩を抱くようにして、身体を縮こませた。

あのイケメンと出会えると信じて疑わなかっただけに、落胆は隠せない。自分を見下ろす男達のうちの誰かに、このまま奴隷として買われてしまうのだとしたら……どんな扱いを受けることにな

るのか、想像したくない。

（早く……早く助けに来て！ このままじゃ本当に……）

あのイケメンが助けに来てくれるなどと、どうして自信満々に考えていたのか。

美桜は己の見通しの甘さを嘆いた。

「二千万フェルン！ 二千万フェルン！ 二千三百万フェルン！ 他にいませんか!?」

一番手の女性ほどではないにせよ、黒髪が珍しいというのは事実らしく、美桜の値段はとんでもないことになっていた。二番目の女性以降、数百万フェルン前後の値が続いていたことを考えると、美桜につけられた金額は破格だ。

（このお金が全部私に入るのなら、テトラにまた一千万払って三度目の人生をやり直せるのに）
そんな不屈きなことを考えてしまうほど、美桜の心は嵐の中を行く小舟のごとく揺れていた。
「四千万」

再び会場が静けさに包まれた。

思わずその声の主を目で探す。会場にいた多くの人々が美桜と同じように声の出所へと視線を走らせ、ハッと息を呑んだ後、口々に囁き合う。

「あれは……冷酷無慈悲な悪魔、シユタルク侯爵じゃないか？」

「まさか、あの侯爵は女に興味なんてないだろう？ 侯爵の見てくれに騙されて擦り寄った幾人も女達が、あの剣の錆にされたという噂があるくらいぞ……」

「なんにせよ、あの男を敵に回すような真似は誰もしないだろうし、黒髪の女は侯爵のものだな。何も知らずに気の毒なことだ」

聞こえてくるのは物騒な内容の囁き声ばかり。しかし、美桜はそれどころではなかった。

視線の先には会場で一番豪華な、一等席だと分かる場所。先程の騎士団長と、彼に競り落とされたピンク色の髪の女性が早くも仲睦まじげに寄り添っている。

その騎士団長の隣に座る、黒いフードを被った男がまさに声の出所だった。

男は苛立ちを感じさせるような荒々しい手つきでフードをバサリと外す。

「うそ……」

思わず口をついて出た美桜の声には、喜びと絶望、安堵と不安という複雑な感情が入り混じっていた。

フードを取った男は、どう見てもテトラに紹介された攻略対象の彼に違いなかった。

胸まで伸びた長い金髪は美しく、常人離れした華やかな顔立ちも、淡い青の瞳も非常に美しい。

美桜が思い描いていた通りの完璧な容姿をしている。

しかし、彼は明らかに人間らしさとはかけ離れた雰囲気を感じていた。

温度を微塵（みじん）も感じさせない鋭い眼差しと、見ているだけで凍えてしまいそうな冷たい気配。口の端を弓形に持ち上げた笑みは蠱惑（こわく）的なながらも、完全に悪役そのもの。

（確かにテトラに見せられたイケメンだけど、めちゃくちゃヤバそうな人じゃない!?）

美桜はその場に倒れそうだった。会場の熱気や好奇の視線、野次を飛ばす声も何もかもが、期待を裏切られた心をぐちゃぐちゃにしていくな。

（何が乙女ゲームみたいな恋愛……よ。顔は確かにいいけど、あの雰囲気……明らかに悪役じゃない！ しかも奴隷として買われるなんて、聞いてない……）

そりゃあ顔だけ見て勝手に一目惚れし、ドラマチックな出会いを妄想したのは美桜だ。でも、美桜が愚かな期待を抱いた元凶はテトラだ。飄々とした死神への恨み言を、呪いの言葉のように何度もう心の中で吐く。

憧れの大恋愛への第一歩は、初っ端から派手に躓いてしまった。

騒めく会場に、髭男の大きな声が響き渡る。あまりの高値に驚いて、しばらく呆然としていたようだが、自分の為すべきことを思い出したらしい。高らかに美桜の未来が宣言された。

「これは、これは！ 我が国の英雄・シャルマン団長の弟子、デュオン・ド・シュタルク侯爵が、黒髪の美女を四千万フェルンで落札です！」

第二章 死神騎士は危険な香り

ハッピーエンドとバッドエンド。乙女ゲームにはその両方が存在する場合がある。

美桜自身はハッピーエンドが好きだ。

特に『優しい王子様系キャラ』から溺愛されるタイプのハッピーエンドがお気に入りだ。終始甘々な態度のヒロインファーストのイケメンから、時には嫉妬されたり束縛されたりしつつも、末長く幸せな日々を送るエンディングは至高だと考えている。

「鬼畜系キャラとのバッドエンド最高！」とか、「ヤンデレ系キャラとのバッドエンドが泣ける」という層が一定数存在するのも知っている。好みは人それぞれだし、そういうキャラであれば切ないバッドエンドの方がグッと来ることもあるのだろう。

けれど思うに、鬼畜系キャラやヤンデレ系キャラは恋愛上級者向けの劇薬だ。素人には扱いが難しく、何よりも危険過ぎる。大した経験もない耳年増の美桜には、明らかにレベルの高い相手だった。

「なのに、どうしてこんなことに……」

そう呟かずにはいられない。二度目の人生で素敵な恋に落ちることを夢見ていたはずなのに、気

が付けば奴隷としてセリにかけられ、攻略対象のはずのイケメンに落札された。

それだけでもショッキングだというのに、今、目の前で繰り広げられている光景にますます頭が痛くなってきた。

「あいたたたたた……ッ！ デュオンさん！ 乱暴はやめてくださいよ！ 私はあなたのように頑丈に出来ていないんですから！」

「よく言う。喧嘩を売ってきたのはお前の方だろう」

高級ホテルのスイートルームのような部屋……の床で、死神・テトラが踏みつけられている。美桜を競り落としたデュオン・ド・シュタルク侯爵によって。

ちなみに美桜はというと、そのデュオンに何故か横抱きにされている。どうしてこんなことになっているのか、微塵も分からない。

セリが終わった後、美桜はデュオンに腕を引かれ、馬車に乗せられた。道中、疲労のせいか美桜は座ったまま眠ってしまったようで、気が付いた時にはこの有様だった。

「俺の番を人間に攫^{さら}わせ、金をせしめようとするとはな。『四番目』の癖に、身の程を知らぬようだ」

デュオンは長い脚で、テトラを一層強く踏みつけた。美桜の理想そのものの超絶美形な顔には、残念極まりないことに『優しい王子様キャラ』とはほど遠い凶悪な笑みが浮かんでいる。

「ほ、ほんの出来心だったのですよ！ だってお金はいくらあっても困らないでしょう？ あれば

ど捜し求めている番を四千万で買えたなら、安いものじゃありませんか！」

苦しい表情を浮かべたテトラは、赤い瞳をわずかに潤ませながらそう訴えた。

床には毛足の長い絨毯^{じゅうたん}が敷かれているものの、その下は石造り。おまけに、デュオンに抱き抱えられた美桜の体重分の圧もテトラの背中にのしかかっている。未だ踏みつけられたままのテトラは、おそらく相当苦痛なはずだ。

流石^{さすが}に可哀想な気もするが、美桜に対しての態度とえらく違うのがどうにも納得いかない。

「どのような手を使ったのかは知らないが、そもそもお前は这个世界に居てはならない存在だろう。そんなお前がこちらの世界の通貨を得たところでどうする？」

「それに関しては心配ご無用です。私には様々なツテがありますから。神に袖の下を渡す時なんかにも使えますしね。あの人達はどこの世界でも行き来自由ですから」

「……呆れた奴め」

そう短く吐き捨てたデュオンに、テトラはニヤリと笑った。尖^{とが}った白い八重歯がやけに目立つ。

「おやおや、その袖の下のおかげでデュオンさんの番^{つがい}をこちらの世界に連れて来ることが出来たのですよ。さあ、この足をどけて私に感謝の意を示してください」

そう言われてしばらくデュオンは思案していたが、やがてうつ伏せ状態のテトラの背中から黙って足を退けた。

そんなデュオンとテトラのやり取りを美桜はじつと静観していた。

というか、自分の状況をじわじわと実感して、動けなくなっていたというのが正しい。なにせ、好みドンピシャな顔をしたイケメンにお姫様抱っこされているのだ。

近くで見るほどに美しいシャープな輪郭と鋭い眼差し。抱き抱えられていることで感じる体温。凶悪な表情を浮かべていることを差し引いても、胸が高く跳ね上がるような心地がして落ち着かずにはいた。

「彼、実物の方がイケメンでしょう？　ね？　進藤美桜さん」

「な……っ、やめてよ！　そんなこと言うの！」

「おやおや、照れ隠しですか？」

美桜がドキドキしていると、いつの間にか立ち上がったテトラにそう言われてギクツとした。

テトラは服の汚れを払うように自分の身体を何度か叩いた後、コテンと小首を傾げてニッコリと笑う。なおも言い返そうとしたところで、デュオンが美桜を抱く腕にギュツと力を込めた。

「え……」

思いがけない行動に困惑していると、その様子を見ていたテトラが高らかな笑い声を上げた。

「ククク……あははは！　ちよつと話をしただけじゃありませんか。そう警戒しなくとも、別にデュオンさんの番を取って食ったりしませんよ。それとも……そんなに近くに番がいると、我慢がききませんか？」

さつきから美桜だけずっと置いてけぼりで、どうやら知り合いらしい二人が何を話しているのか

分からない。ただ、美桜がデュオンの番であるということだけはなんとなく理解した。

（番って……あのツガイよね？　鳥とかで言う夫婦みたいな……）

油断すると鼻先がシャツ越しにデュオンの胸板に触れそうなほど密着している。男物の香水のスモーキーな香りに、ふらふらと酔ってしまいそうだった。

「……まあいい、今回ばかりは俺への無礼も目を瞑ってやる。気が変わって斬られる前に、さつきと自分の世界へ帰れ」

頭上で響く、低い声に耳たぶをくすぐられるような心地がして、ビクリと身体を強張らせる。

そんな美桜をデュオンは切れ長の目でチラリと見て、再び視線をテトラへ向けた。

「ククク……分かりました、分かりましたよ。とにかく、私はデュオンさんが見つけられなかった番を見つけ、きちんと手渡しましたからね。その事実はいつかりと覚えておいてください。これは大きな貸しですよ」

「くどい。早く去れ」

「おお、怖い怖い。ああ、ちゃんと伝えていませんでしたが、進藤美桜さん、あなたはこの死神の番なのです。申し訳ありませんが、死ぬまでデュオンさんのお相手をお願いしますよ。まあ、私が言わずとも離してくれないとは思いますけど」

テトラは口の端をクイツと吊り上げると、赤く光る目を一層細めた。

「ちよつと、それってどういうこと？　説明してよ！」

抱き抱えられた身体を何とかして振り、ニヤニヤと笑うテトラに尋ねる。

「詳しいことは本人から聞いてください。私はデュオンさんに貸しが出来て満足ですから、元の世界に戻ります。では、ご武運を……」

「あ……！ 待つて……！」

声掛けも虚しく、テトラはその場から蜃気楼のように消えた。

「いいか、今後は俺の前で他の男と親しげにするな」

テトラが去つてすぐ、美桜は真剣な眼差しをしたデュオンにそう言われた。

手を伸ばせば届くところにあるその顔は本当に二次元の世界から飛び出してきたかのように整つていて、胸の辺りまで伸びた長い髪はまるで金糸のようだった。

本当に奇跡のような存在だ。

「言葉が通じないのか？ ……いや、奴とは話をしていたな。おい、分かるか？」

「は、はあ……」

美桜の気の抜けた曖昧な返事に一瞬綺麗な形の眉をビクリと持ち上げたデュオンだったが、しばらく美桜を見つめてから視線を逸らし、ため息を吐く。そんな姿さえ様になるのはもはや反則だろう。

（いや、そのため息ってどういう意味!? 死神だとか番だとか、訳分かんないことばっかり起きて

ほんと理解が追いつかない!）

「その服、奴が用意したものだろう。気に食わない」

私も全然気に入ってないですよ、と言いたいのを美桜は我慢した。薄っぺらい生地ワンピースの下はノーブラで、ショーツしか身に着けていないのだ。胸の突起を誤魔化すため、ずっと身体の前で両腕を交差しているのも疲れてきた。

「……俺が怖いのか？」

じつとしたままの美桜を見て、デュオンは怖がっていると解釈したらしい。

怖い訳ではない。とんでもないイケメンに抱き抱えられて羞恥を感じているのだ。顔に見惚れて言葉を発する余裕がなくなってしまった、というのもある。

思わずフルフルと頭を振ると、何故かデュオンは苦しい表情を浮かべ、美桜をお姫様抱っこしたまま部屋を移動し始めた。

見るからに高級そうな装飾が施された廊下に出ると、遠目に重厚な両開きの扉と、その両脇に控えるメイド姿の女性二人が目に入った。

（メイドさんがいるなんて、本当に世界が違う）

抱っこされている姿を他人に見られることに抵抗を覚えたが、美桜とデュオンが近づいても、俯き気味なメイド達は無反応だった。まるで家具か何かのように感情を全く表に出さない。彼女達は一言も発することなく扉を開けてくれた。

デュオンは特に礼も言わず、それが至極当たり前といった態度で室内に足を踏み入れる。どうやらここは寝室らしい。洗練された調度品の数々と、見たことがないくらい大きな天蓋付きベッドが置かれている。

（これは……もしかして創作物でよくある『ここがお前の部屋だ』的な……？）

今日一日で色んなことがあり過ぎて、頭がパンクしそうだった。もう何が来ても『ああ、そんなんですね』と平坦な声で一蹴できそうなくらい、究極に疲弊していた。

「脱げ」

美桜を天蓋付きベッドに下ろすと、デュオンはさも当然のようにそう命じた。

「はい？」

ベッドの端に腰掛けた美桜は、一瞬己の耳を疑った。

「自分で脱がないと言うのなら、俺が脱がせてやろう」

「え、ええっ!? いや、あの、待つて……っ、待つてくださいっ！」

——そう、決してこんなはずじゃなかった。

デュオンに服を脱ぐよう促された美桜は、脱がしてやろうという申し出を丁重に断り、震える手でワンピースの胸元に触れた。

この部屋の床にも、裸足の足裏が何とも心地良い毛並みの絨毯が敷かれているけれど、今の美桜

にそれを味わう余裕はない。

意を決した美桜は、デュオンに背中を向け、ゆっくりゆっくりワンピースを脱いでいく。

焦らしているように見えるかも知れないが、指先が震えておぼつかないだけだ。

「……っ」

良く言えば色白で華奢な、ありのままに言えば臥せっていたせいで日焼けを知らない生白い肌と、痩せて薄っぺらい美桜の身体が露わになる。入院先の医師や看護師以外に身体を晒すのは何年ぶりだろうか。

「ぬ、脱ぎました……っ」

超下級のイケメンに裸体を晒してしまった。まっすぐに向けられた視線に耐えられずギョツと目を瞑る。

服を着替えさせたいのか何なのか知らないが、さっさと欲しいのにデュオンは何も言わない。その間、美桜は強く目を瞑ったまま、ショーツ一枚しか身に着けていない裸体を申し訳程度に腕で隠した。

「お前、名はミオとか言ったか。その身体……十九と聞いたが本当か？」

美桜はその言葉に唇をグッと噛む。この世界に来てから自分の身体について散々馬鹿にされてきたので今更といった感じではあったが、やはり面白くはない。

「本当です！ ……まあ、一応」

実際には魂は三十七歳で一度人生を終えている訳だが、身体は十九歳に若返っているのだから嘘ではない。

「とても『成体』には見えないな」

外見に何の欠点もない異性にそう告げられ、美桜は奥歯を食いしほる。

先程のテトラのような目に遭いたくなければ、デュオンに口答えをしてはならない。頭ではそう分かっているのに、自分の置かれている理不尽な状況への苛立ちが徐々に込み上げてきた。

攻略対象であるデュオンが理想のタイプのイケメンで、勝手に優しい性格をしていると思い込んでしまった美桜にも落ち度はあるが、詐欺に遭ったような気分だ。

二人の会話の内容から察するに、テトラはデュオンに恩を売り、ついでに大金をせしめるために美桜をこの世界に連れて来たのだ。当初聞いていた魂を時間差で手に入れるだのなんだのというのは、おそらくこじつけだったのだろう。

というか、デュオンから大金をせしめる算段だったのなら、美桜から一千万円を巻き上げる必要はなかったんじゃないかとすら思える。何とも腹立たしい。

「死の間際に、足元を見られて唆されてここに来たのに、どうしてそんなことまで言われなきゃいけないんですか……」

小さな声でそう不満を零したその時、思い出した。湖のほとりでテトラが話していた言葉を。

——『ちなみに、この攻略対象の男性にとつての理想の相手は……なんと進藤美桜さんなんで

す！ このチート、一千万円払った価値があったでしょう？』

今となってはテトラのことなど全く信用できないが、あの言葉が本当なのだとしたら——

「私のことが好きな男性も……もしかしたら、いるかも？」

微かな希望を抱いて、デュオンに鎌をかける。

「確かに。流石は番といったところか。相手がどんな容姿をしていようが、無条件に惹かれるように出来ているらしい」

ふむ、と顎に手を当ててこちらを眺めるデュオンは、美桜の心をザクザクと遠慮なく切り裂く。好意の有無という意味では肯定したはずなのに、とんでもなく失礼なことを言われた。

なのに、何故かドキドキしてしまうのは、規格外の超絶美形のせいかな、それとも低く甘い声色のせいかな。

「しかし、あまりにも貧相な身体つきだ。これまで余程食い扶持に困って生きて来たのか？」

「ひ、貧相ですって？」

流石にそれは、好みの異性にかける言葉ではないだろう。

「誤解するな、奴が分をわきまえずに俺の番を虐げていたのかと心配しているだけだ」

「あ、それは違います……ただ、私は……ここに来る前まで病氣だったの」

「病氣……そのせいでそんなに痩せ細るなど、人間とはか弱い生き物だな」

デュオンはそう呟くと、何を思ったのか眉尻を下げた。